



作 森川成美

絵 りょう

「なあ、妖怪ワスレナイ。おまえ今年になってすっかりさぼってるだろ」

妖怪サトリが言った。

「え？」

「働いてないだろ」

「そんなことないさ、ちゃんとやってるよ」

「いや、これ見てみる」

サトリは、洞窟の壁に干してあるワスレナグサの束をゆびさした。

「夏至の日までに、壁いっぱいにならないと、妖怪パーティーができないんだぞ。ワスレナグサをたき火にするんだ。夏至まで、あとひと月だ。まさか忘れたわけじゃないだろうな」

たしかに、サトリの言うとおりで。

ワスレナグサを採ってくるのは、おれの係だ。もちろん忘れちゃいけない。忘れるわけがない。おれはものを忘れなだけで、たしかにまだ壁は半分しか埋まっていなかった。

「今年は、一月に風邪ひいたし、二月は……」

「二月は青鬼とけんかして、あんなやつらとは、もういっしょになんてやってゆけないってすねてたしな。三月はちよっときげんなおしたと思ったら、調子こいてあっちこちに出かけちゃ、お雛様の甘酒飲みすぎて腹こわしたし……」

サトリは、人の言おうとすることを先取りして言ってしまう妖怪だ。たしかにおれはそう言おうかなとはおもっていただけで、そういう言い方じゃない。